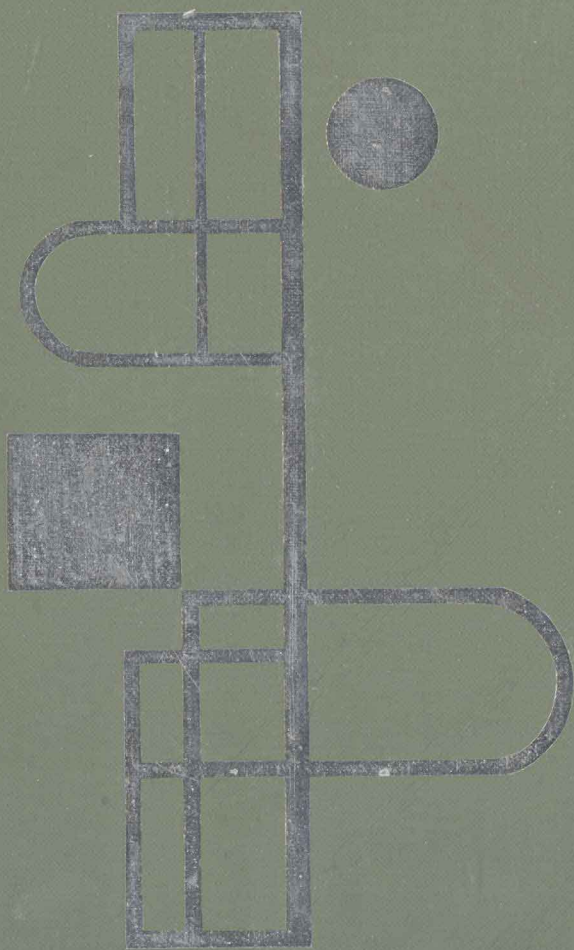
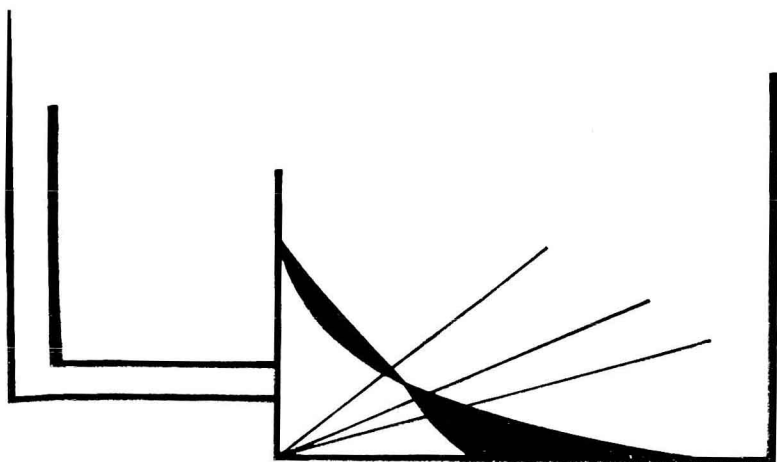




舟橋聖一 集

新選 現代日本文學全集

14



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 14



新選 現代日本文學全集

舟橋聖一集

昭和三十三年十二月五日 発行

著者 舟橋聖一

発行者 古田晁

印刷者 山田一雄

発行所 筑摩書房

振替 東京一九五七六八

製版印刷株式会社
精興社
美行製本所

舟橋聖一集 目次

雪夫人絵図……………五

若いセールスマンの恋……………三三

鴛鴦の間……………三二

堀江まきの破壊……………三九

力士と双生児……………三〇

過去の夕景色……………三七

善意……………三四二

白薊……………三四九

もて遊び草……………三七二

顔師……………三六三

霧子夫人行状……………三九四

舟橋聖一の作家精神……………浦松佐美太郎 四八

解説……………河盛好藏 四三

装帧
恩地孝四郎
恩地邦郎

舟橋聖一集

第一部

白狐の章

掃くあとから、あとから、すぐ又、散つて来た。そのくせ、見上げると、枝々には、一ぱいに、見ごとな黄葉である。さういふ見ごとな黄葉が落ち散るので、銀杏の落葉は、よけい、佗しいのもあつた。

浜子は、箒の手を休めて、その一葉を取つて見た。——目に沁みるやうな黄の色だつた。指の先が、黄に染まりさうだつた。ところどころに、緑の斑になつてゐるのもあつた。黄と緑が、だんだん染になつてゐるのや、その境目が、あいまいで、ぼかしたやうになつてゐるのもあつた。葉の肉の、うすいのもあれば、厚いのもあつた。

伊豆の海辺で、銀杏が黄葉するのは、十二月

に入つてからである。寒い山国で育つた浜子は、はじめて感覚する南国の冬に、目を見はるものが多かつた。山と海の、季節のずれが、すぐにはのめこめない程であつた。

浜子には、両親がゐなかつた。これには、むしろ事情がある。育てられたのは、祖父母であつたが、戦争中は山間の小さい駅の女駅員を勤めたりした。終戦後、伊豆山の或る別荘で、留守番をしてゐる寺石さんから手紙を貰ひ、御大家の非常にきれいな奥さまのお附きに、といふ話で、それが、浜子を山から海へ、誘ひ下ろした空想だつた。

白い御影石の門と、銀杏の大樹、シェパードのある三階建の洋風の別荘。海は庭の前面を東南に展いて、北は高い崖。信濃といふ標札がかけてあつた。

寺石さんがいつた。

「大旦那さまは、貴族院の長老で、信濃長左衛門さま。参議院なんていふ安つばいではない。昔の、バリバリの貴族院議員。原敬さんを向うに廻して、大向うを唸らした華胄界の一人者です。その孫さんのお嬢さまが、信濃家の一粒種で、御養子をお取りになつたのが、今の旦那さまの、信濃直之。おくさまのお名前が、雪さま。ことし二十八におなり遊ばします」

「信濃雪。山を思ひ出しますわ。飯綱山、黒姫山、妙高山、それから、昔、鬼女のすんだ戸隠山の雪。その向うは白いアルプスよ——」

と、浜子は、故郷の山々を目にうかべた。

「あなたが、一日早く、熱海へつけば、おくさまと一緒に、京都へつれてつて頂けたものを」と、きんがいふ。ほんの一日ちがひで惜しいところだつた。旅行は一週間の予定だといふ。

「京都へ、何しに、いらしたの？」

「いろんな入りくんだ訳がおりになるの。かういふ御大家ほど、複雑なもんですよ」

「お気の毒ね。おくさまは、不幸な方？」

「そりやア、吾々からいへば、物に御不自由がないのだから、いかにも、御仕合せだと思はれるが、人間の不幸は、そればかりでも、推しはかれないでせう」

さういつて、胸の上で十字を切つた。事もなげな、所作だつた。この人がクリスチャンであることは、山でも聞いてゐた。山のその部落は、寺のない村だつた。昔、切支丹が、逃げこんだまゝゐつたので、一村の大部分が、隠れた信徒であつた。浜子の祖父も祖母もクリスチャンで、母のほかに女をつくつて村を逃げた父は、恐るべき背教徒であつた。寺石さんは、逃げた父があきらめられず、村はづれの松の木につるさがつて死んだ浜子の母のお針友達だつた。母より、六つ下の三十六で、器用の生れであつたお針のほか、髪結やら料理やら、の手職にめぐまれてゐた。

パリカンをもたせれば、男の理髪もやり、花鋏があれば、つゝじや楓の刈込みもやれた。

浜子は、キリスト教はきらひであつた。祖父たちは、それを背徳の父のせゐにしたが、浜子

自身は、父とも別の観点に立つてゐるのだと考へた。浜子は、逃げた父にも、死んだ母にも、興味がうすかつた。

「では、御夫婦仲が、わるいんですか？」

と、浜子はきいて見た。

「……………」

きんは答へずにゐる。

「どう、あたつたでせう」

浜子は、自分の狙つた興味が、低すぎたかと、心配しながら、却つて、大胆になつてゐた。

「まづ、当りましたね」

「たとへば、どんな風なんでせう」

「追々にわかるでせう。待つていらつしやい」かういふ時に、ちよつと勿体をつけるのが、きんの口ぐせであつた。

温泉は、朝晩に、熱い湯を噴いたから、いつでも、好きな時に、浴びることができた。白と桃色のタイル張りであつた。先きに、きんが入り、次ぎに浜子が入る。それつきりであつた。きんは、きれいだから、湯垢一つうかべてはなかつた。それなのに、蓋を取ると、銀杏が一枚、散つてゐた。毒々しいほど、黄色いので、お湯が黄色に染まりさうであつた。

指でつまんで、白いタイルに、べつたり、はりつけた。門のそばの銀杏の枝から、どういふ風に、弄はれて、窓の湯気穴からでも舞ひこんだのだらうか。

浜子は、雪夫人が、この浴室で、静かに湯を

引く光景を想像した。寺石きんの話だと、おくさまは、慎みの深いお方で、どんな場合でも、決して、男とも女とも、御一緒に、沐浴遊ばしたことがない。それどころか、御召替への場合も、お乳はむろん、お背中さへお見せになつたことがない。

一体、いつ御肌着をお取りかへ遊ばすのかしらんと、注意してゐるのだが、それがわからない。然し、一日おき位に、洗面所の横の、洗濯ものの入れのバスケットに、必ず、上下の御肌着が入つてゐる。

「それがね、あなた」

と寺石きんは、はにかんだ微笑をうかべて、

「決して一度でも、よごれてゐたりしたことがないんですよ」

浜子は、まあと目をまるくし、嘘でせう、とはいはなかつた。雪夫人を見ないうちは、嘘とも、真実とも、容易には判じ難いことだつた。

「洗ふのは、寺石さんが洗ふの」

「むろんですよ。洗濯屋さんなんぞに出すのは、勿体ないんですよ。脂の出るさかりの、若いご婦人で、全く、めづらしい」

「蠟人形のやうな方だわね」

「あなたは、まぜつかへすからいけない。でも、あと、五日して、お帰りになつたおくさまのお顔を見たら、あなただつて、そんな半畳は入れられなくなります」

「すみません」

と、浜子はあやまつた。夜は、寺石きんの部

屋に、床を二つ敷いて寝た。然し、四日目の朝、浜子が床をたぐんでゐると、

「今夜だけ、お二階へ、休んで頂だい」

「はい」

とは答へたが、とつさには、のみこめなかつた。

夕方になつて、ゲートル巻の男が、たづねてきた。

浜子はそれで納得がいつた。寺石きんは、男をさつそく、浴室へ案内する風であつた。それで、浜子は又、銀杏を掃きに、庭へ出た。

手水鉢の下や、沓脱のかげまで、黄色い葉が廻つてゐた。浴室で、湯を流す音がしてゐる。シェパードが足音も立てずに崖を下りてきた。

やがて、きんが出てきて、

「紹介するから来てね」

といつた。浜子は、おとなしくいつた。きんの部屋には、もう卓袱台の上に食事の支度が出てゐた。

「主人です。一週間に一度、帰つてきてくれるのです。東京の大家庭組で、現場長をしてゐますの。おくさまも、公認してくださつて、一週間に一度の保養をさせるんです。お酒も、これは、私の分の配給ですからね」

といひわけのやうにいひ、それから浜子を、

「前にもお話したことがあつたでせう。昔のお友達。といつても、ずつと姉さん株だつたのよ。でもクリスチャンとしては、まちがつた行為をしたんだけど、この人のお母さんなの。その

御縁で、おくさまにお願ひしたら、是非つて仰言るんで、お呼びしたんですの。きつと、おくさまのお氣に入りになると思ふんだが、どうでせう」

「安部浜子と申します。どうぞよろしく」

と、浜子は挨拶をした。巻ゲートルの男は、丹前に着かへると、案外、粹で、小唄でもやりさうだった。

きんは、しきりに、自分らは古夫婦だから、遠慮なんかいらなから、といひいひしたが、その実、男に首つ丈らしく、ふだんとは、うつつ変つて、浮き浮きして見えるので、浜子は、傍にゐるとまぶしい思ひがした。まだ、男が、猪口を伏せないうちに、食事をすまして、二階へ上つた。

二階は、ヴェランダがあり、そこに立つと、熱海の灯が望まれた。魚見崎の青い袖の遠景に、重なり合ふ旅館やホテルの窓々が、芝居のセツトのやうだった。

ヴェランダのある部屋は、雪夫人のお居間であらう。総桐の縮緬ダンスが、はめこみになつてゐたり、ぜい沢な人形箱には、電気のチューブが仕かけてあつたりした。三味線箱、鎌倉彫の姿見、北側の壁には、新しい画風の、背ろむきの裸婦と椅子のある絵がかゝつてゐた。サインだけでは、浜子には、その画家の名前はわからなかつた。

浜子の寝る部屋は、一階で浴場への廊下をへだてた小間だった。雪夫人の、衣裳替への控室

かもしれなかつた。

早く寝ようと、廁へ下りていくと、男はまだ、のんでゐるらしかつた。そんなに、沢山、配給のお酒があるのかと思つたが、不問に付すことにした。そんなことに神経を使つたら奉公はできない、と考へ直したのである。

次の朝、起きると、日が高かつた。シェパードが吠えてゐる。それで目がさめたのだらう。特有の、甘い吠え方であつた。びつくりして、寝衣のまゝ、東側の窓をあけた。銀杏が、さんさんと日を浴びて光つてゐるやうに見えた。ふと、かへり見ると、胸がはだけてゐた。シュミーズの上に、一枚、ゆかたを着ただけなのに、寒くも何ともない。山では、もう、厚い、ネンネコ半纏を着たり、真わたを首にまいたりするの。

お帳場へ顔を出すと、もう、寺石きんの亭主は帰つてゐた。

「今朝、一番で。いつも、さうなんですよ」

「まア、とんだことをしましたわ」

「そんなこと、氣にしないで結構」

「でも、そんなに早いんぢやア、あんまり、保養にもならないわね」

「せめて、今日、半日でも、ゆつくりできれば、ね」

と、きんは、しんみりしたあと味の中でいつた。浜子は、朝湯へ入つて、髪を洗つた。

いつもより湯垢の多いのは、あの男のせみだ

らうと思ひながら、新しい湯を出した。垢はすぐ、ふき流れた。

温泉を出て、暫く、髪に日を浴びてゐると門のところ、人の声がした。浜子はハツとして立ち上ると、手で髪を束ねながら、庭口へ廻つていつた。

すらりとした男が立つてゐた。黒い、ぢりを着て、畳附の雪駄をはいてゐる。

「おくさん、おませんか、おくさんは」

少し、せつかな調子できく。

「はい。おるすでございます」

「おくさんは？」

「おくさんも、熱海へ買出しに出かけましたわ」

「そいつは弱つたね。何しろ、汽車がこむんでね、今夜は、静岡に泊つて、静岡発の一番で、のりつぎのりつぎで、大阪までいく途中なんだが。それにしても、仕様がな。一寸そこで、休ませて下さい」

「はア、どうぞ」

「庭から廻つていいでせう。こりやア、銀杏が見ごとだ」

と、遠慮なしに木戸をあけ、芝生をふんで縁側に尻をかけた。

「おくさんは、どこへいつてゐるんですか」

「京都ださうでございます」

「京都？へえ。ぢやア、明日、京都へ下りるか。宿はどこ？」

「存じませんわ。何でも、加茂川の傍で、河原

を隔て、南座が見えるうち、ださうですわ」

「南座が見える——」

男は、頭の中で考へてゐる様子だつたが、

「すると、木屋町だ。何をしに、いつたんだらう」

さういつて、キツと浜子を見る目が、光るやうに思はれ、その視線は、男の美しさであつたとつさに、役者かもしれない、と思つた。役者なら、歌舞伎役者で、二枚目で、若旦那になりさうである。

すると、手提から、白いボールの箱を取り出して、

「一つ、どう」

とすゝめた。蓋をとると、チョコレートのパイが二片、苺のはさんだクリームケーキが四片ほど。そして、無理に、一つ、つまゝされた。

舌の上で、溶けるやうに、甘かつた。

食べてから、あわてゝ、台所へ廻つて、コーヒをわかし、もつていくと、もぢりの釦を外した下に、塩沢の、細かい紐がすがり又、よく似合つた。浜子のやうな山育ちでも、ブルツと一つ、身ぶるひが出さうになつた。

それとも、華族さまの若さまかな。役者にしては、品がありすぎと思つたりした。

「すみません——もう帰るから。よろしくいつて下さい」

立つたまゝ、コーヒを半分のみかけて、さういつた。

「はい——失礼でございますけれど」

浜子は、オドオドしながら、名前をたづねて見た。

「方哉といつて下さい」

「お名前ですのね」

「それでわかる。あゝ、さうだ。おきんさんには、黙つて下さい。おくさんだけに帰つたら、ソツといつて下さい」

「京都でお逢ひになるんぢやないんですか」

「それも、わからない。若し、あなたが忘れたら忘れたで、それでもいいんです」

「忘れませんわ」

と、浜子はわざとらしくなくいつた。目を伏せてゐたが、方哉といふ人の、背中へ、金色に変色した銀杏の葉が散るのが、うつり、それが黒のもぢりと、すばらしい配色だつた。浪の音がした。

雪夫人の帰宅の日が来た。京都の朝の急行にのれば、熱海は夕方であつた。寺石さんが駅まで迎へに出た。山国の小駅に勤めたことのある浜子は、汽車の発着には、過敏だつた。定時に到着したとして、駅から別荘までの時間をはかると、そろそろ、玄関のあく時分だと、立つたり坐つたりした。はじめて雪夫人にあふのが、そんなに恐ろしいのだらうか。自分でもいやになる程、固くなつてゐた。

が、崖の道の足音が、玄関の方へ廻らずに、やがて勝手口の木戸がバタンとあく、と、帰つてきたのは、寺石きん一人だつた。

「まあ、どうなすつたのかしら」

「ホームが、ガランとなるまで立つてゐたんですよ。でも、下りていらつしやらないんだもの」

——京都のお話が、うまくいかないでせう」と、きんはいつた。浜子は、期待が大きかつただけに、がっかりした。このまゝ、雪夫人は

帰らず、三階建の洋風の別荘は、主人のゐない廃屋になるのではないだらうか。自分は、帰らぬ雪夫人を待つうちに、いつか、この別荘に、閉ぢこめられてしまふのではないだらうか。と、妙な取越し苦勞に攻められた。

浜子は、この間、きんの留守に、雪夫人をたづねてきた若い男の話を、きんにしたもののか、どうかと迷つた。然し、きんに話せば、謎は解けるにしても、直接雪夫人に話した時の、その瞬間の夫人の表情をのぞくことは出来ない。その方が、もつと直観的に、何かを語るかもしれないと思ふと、やつぱりあれは秘密を守ることになつた。

浜子は、銀杏を掃くのもあきたので、次の朝からは、寺石きんの承諾を得て書棚の御本を見せて貰ふことにした。浜子は、雪夫人のお相手をしなから、教養を積み、勉強をして、出来たら、文章の一つも書けるやうになりたいと考へてゐる。

——山間の小駅の女駅員をしてゐた間も、時時、短歌や短文を、管理部から出てゐる文化ニュースに投書して、一度ならず、選に入つた覚えもある。あご鬚のある助役さんに、ほめられ

たりもした。

雪夫人の書棚には、外国の小説や現代作家のものが並んでゐた。全集本も、漱石や鏡花、ドストエフスキーやチェホフなどがあり、どれを拝借していいか、迷ふほどであつた。迷つたあげ句、平凡に「桜の園」を取り出した。

夢中になつて、読みふけてゐると、丁度二幕目の終り、トロフィーモフとアーニヤが、月の出の月光を浴びながら、話してゐるところ。エビホードフがギターを鳴らし、依然として、沈んだ歌曲をひいてゐるのが聞え、どこかボブラの本立の彼方で、ブーリヤがアーニヤを探してゐる声がある。——そこまで、読んだとき、頁の間から、バラツと落ちた紙片がある。まるで、まるで肥つたきれいな赤ちやんが木馬につかまつて立つてゐる写真だつた。御誕生位か、或是一年半といふところか。

雪夫人の赤ちやんかしらと、目を凝らす。としたら、一体、この赤ちやんは、どこにゐるのだらう。こんな赤ちやんがあるのに、夫婦仲がわるいなんて、常識では考へられないが、昨夜も寝てから、寺石さんの話だと、旦那様の信濃子爵——といつても、終戦後、そんなものは、吹きとんでしまつたことはいふまでもない。子爵は飛び散つても、昔の夢は捨てがたく、お手のついた女を三人も囲つてゐるほか、新橋の、赤坂の、祇園の、新町の、と、世話をしやる妓の数も、ふえるとも減ることのなかつた御乱行振りは、世の中の移り変りと共に、さすがに、

整理の必要があり、そのことで、御隠居の大旦那はじめ、家令やら執事やらも、並大抵の苦労ではない。然し当の直之氏は、却つて袴をぬいで丸腰になつた気安さもあり、昔より、遊びよくなつたなどと、御託をいつて、いまだに、その鋒ををさめない、中毒性である。いよいよ食へなくなつたら、シナノ・タンゴバンドを編成して、自分が指揮をするなどといつて、執事共を煙にまく。

目下の最愛は、京都にゐる側室で、これは京都に住むからといつて、京美人ではない。銀座の御笠ホルのナンバーワンを引つこぬいて、東京はうるさいからと、焼けない京都へ移し植ゑたのが、病みつきで、殆ど、京都にばかりゐる。東京の本宅は、法事以外には顔を出さず、熱海の別荘も、一月か二月に一度、それも、ほんの申訳のやうに、一日泊りで来てすぐ帰る。泊るにしても、夫婦は、ベッドを一つにするこゝとがないのださうだ。

「では、別々に、お休みになるの？」

と、浜子は、満身に漲る好奇心できいた。

「さうなんですよ。おくさまは、お二階に。旦那さまはお三階の洋間に」

「まあ」

と、浜子は、驚くそぶりをしたが、然し、たとへ、別々に寝たからといつて、夫婦の契りが行はれないとは限らぬと、疑る心もあつた。寺石さんは、階下のお次ぎの間へ寝るのだから、一晩中、ついてゐるわけではなし、お休みをい

つてからあとの夫婦の秘密なんぞに、タッチ出来る筈のものではない。

現に、山間の駅々の話でも、男女の区別は著しく、女駅員の貞操は、堅く保護されてゐる筈でありながら、いつか男駅員の子を孕んで、駅から追はれるケースは、一再にとゞまつてゐない。生活力の旺盛な精子は、野こえ山越え、風にのり、闇を流れて、幾重かの重い扉をつらぬくのであらうか。常識では判じきれない不思議な受胎の数々は、浜子のやうな世間知らずの女の耳にも入つてゐる。

が、まあ、寺石さんが、さういふ以上は、知つたかぶつて詮索しても始まらないから、仲のわるい御夫婦といふことにしよう。

「ところが、おくさまは、あの通り、お纏綴（まとづ）していらつしやるから、何のかのといつて懸想をなさる殿方も多い中に、キッチンとして、身をまもつていらつしやる、まことに操の正しい、有難い貴婦人です。たゞ、私の願ふのは、何とかして、旦那様が、目をさまし、普通通りのお仲にお戻りになることだが、先づ先づ、九分通りは、かなはぬ望みでせう」といつて、又、アーメンを口の中で唱ふらしかつた。

「おくさまに、お友達はないのでせうか」

と、浜子はたづねた。

「それは、いらつしやいますよ。若い人もあれば、女の方、男の方、お年取つた方。段々に、あなたにもわかるでせう。一番、ひんぱんにた

づねてくる人で、おくさまも、大きらひ、わたしも、嬉しくないのは、この崖の上の、もう一つ、石段を上つたところにある皐月といふ別荘の主人——尤も、これは、昔、政友会の幹部級で、富原といふ金持の二号さんが住んでゐた家を、終戦すぐ、安く手に入れて、見つきやなんかを修繕したんですがね。この皐月さんといふ成金さんが、チョクチョク、来ますよ。もう六十近いんでせうが、変りもんですよ。よそには、女がゐるのかも知れませんが、少くも熱海には、誰もゐないんですよ。可愛い少年を使つてゐてね、男のくせに、三味線もひけば、花もいけるんです。では、風流老人かといふと、チャキチャキで、お金をまうけることは、特別にうまいといふ狸さんです」

と、寺石さんは、口を極めて皐月別荘の主人の悪口をいつたが、寺石さんが、これだけいふところを見ると、浜子には皐月老人なる人物は、只者ではないと、思はれた。

なるほど、そんな話をした次の次の朝、十五、六の美少年が、崖の上から、口笛を鳴らしながら、下りてきて、久しぶりに、銀杏を掃いてゐる浜子の背ろで、

「お姉さん。おくさん、お帰りになりましたか。主人に、聞いてこいつて、いひつけられましたんで」

と、澄んだ声でいつた。

「どなたです」

「皐月別荘の者です」

「あなたの名は」

「誠太郎」

ビヨコンと、頭をさげるとき、崖の上のバス道路を雪夫人らしい婦人をのせたハイヤーが走つてきた。そして、すぐ、頭の上で停つた。ドアのあく前に、窓から手を出して、寺石さんを呼ぶのが見えた。印象的な白い手だつた。浜子が、それに応へる前に、誠太郎の方が、帽子をふつた。そして、白狐のやうに、崖の石段を三段づつ、とびはねていつた。

桃の実の章

せつかく、雪夫人がお帰りになつたのに、すぐ又、お出かけになることになつた。といふのは、御本宅の大旦那様が、急に病気があらたまつて、重態におちたといふ知らせがあつたからである。

「それぢやア、浜子さん、あなた、一緒に来て頂戴ね」

と、雪夫人は、すぐ化粧にかゝりながらいつた。浜子はそれだけで、胸がドキンとした。はつのお伴を仰せつかつて、果して、お役目が勤まるかどうか、ずゐ分、心細いのである。

雪夫人の支度は、自分でした。テキパキとしたものであつた。自動車がなかなか、来ないので、支度の出来た雪夫人は、銀杏のところまでお出ましになつて、待ちかねる風であつた。何といつても信濃長左衛門氏は、雪夫人のほんた

うの父親であり、父一人子一人の血のつながりは、この場合、一分一秒も、惜しいところなのだらう。

そこへ、山の方から、皐月氏が、下りてきた。荒い縞の、楽屋着のやうな丹前を着て、ステッキをついてゐた。

「お帰りなさい。京都はどうでした。熱海からいつたんぢや、寒いでせう」

「はい」

「又、お出かけですか」

「はい。父が危篤だといつて参りましたんで」

「先生が、あの、危篤」

「はい」

「お年は」

「七十三ですから、年に不足はないんでございますけれど」

「もう七十三におなりですか。まだ、お若いやうにお見受けしたがる——」

「終戦以来、急に年をとりましたんです」

「わしは又、久しぶりに、おくさんから京土産のお話など伺へるつもりでゐましたのに」

といつて、皐月氏は、ニヤリと笑つた。浜子は、中年の男の、卑しい表情に触れたやうな気がして、ぶるつと、一つ、身顫ひが出た。

寺石さんが、いやな男だといふ意味もわかり、自分も同感だつた。そして、早く、自動車がこないかと、崖の上の道を仰いだ。

「実はね、おくさん——お宅は、温泉はよく出ます？」

「はア」

「若し、出るやうなら、入れて頂かうと思つて。何しろ、この頃は電力がうるさいので、自分のうちに、風呂があつても入れませんので。お宅のは自噴だから都合がよろしいですな」

「どうぞ、お入り下さい」

と、雪夫人はいった。ほんととは、迷惑にちがひない。然し、雪夫人の性格では、この押しつけがましい要求を、むげに斥けるわけにはいかぬのであらう。

「では、入れて頂きます。誠太郎と二人。よろしうございますな」

「はい」

浜子は、きいてゐるだけで、皐月氏の図々しさには、あきれかへつた。

そこへ自動車がついたので、浜子は、皐月氏には、あいさつもしないでバスケットを持つて、石段を上つた。

車が走り出してから、

「おくさま、皐月さんつて、ずる分、図々しい、いやな方ですね」

と、いつた。すると、雪夫人は、シヨールの襟元を合はせながら、

「あなたも、きらひ」

「え、第一印象ですけれど」

「誠太郎は？」

「あの子は、好きですわ、でも皐月さんなんかに入られては、せつかくのお風呂場が、けがされるみたい」

と、浜子は、いひすぎるかしらと心配しながら、いつた。

「お風呂位ならいいんだけど、ウイスキーなんか持ちこんできて、うちのヴェランダでのみ出すと、譚をやつたり、義太夫をうなつたりしはじめると、寺石さんも、閉口するのよ。酔ふと、くだいから」

「さうでございませうね」

「何しろ、御近所だし、知らん顔もできないもんだから」

「でも、たまには、はつきり、おことわり遊ばす方が、よろしうございますわ」

といふ中に車は熱海駅前の広場へついた。

信濃家の本宅は、池の端で、焼跡の中の焼けのこりの一劃である。

残念なことに大旦那様は、もう昏醉状態におちてゐた。枕もとで、二三度、お呼びになつたが、氣のつくわけもなく、もう、面に死相とやらが、あらはれてゐる。

部屋には、女の方が、二人ゐた。一人は、夜会風に髪を巻いた五十がらみの婦人で、もう一人は、三十そこそこと見えた。あとできくと、二人共、正室ではない由である。雪夫人の、ほんたうの母御は、雪夫人がまだ、いたいの頃に、亡くなつたらしい。

暫くして、雪夫人は、病室を出て、離れの間へ、入つた。浜子にも、ついてくるやうにいひ、その障子をたてきつて、

「こゝが、わたしの部屋だつたんですよ」

と、見廻すやうにしていつた。八畳間である。木口のしつかりした普請であることはいふまでもないが、簞笥などもみなはめこみになつてゐる。南は濡れ縁がついてゐて、茶がかつた庭石と手水鉢の配置もおもしろい。

ところが、掃除が行届いてゐない。飾り棚の上にも白い埃がたまつてゐるし、天井の煤も、糸をひいてゐる。庭も落葉が一杯だ。いつ掃いたのか。霜にさゝむけた土肌が、汚い形容でいへば皮膚病を聯想させる。無理もない。その家に病人が出れば、庭掃除などまで、心のとゞくわけがない。

「今夜は、あなたもこゝに、お寝なさい」

と、雪夫人はいつた。で、浜子は、すぐ掃除にかゝつた。台所から、雑巾バケツと箒、はたきの類を借りてきて、天井の煤まではらつた。その間、雪夫人は、もう一度、様子を見てくるからとて、病室へ入つていかれた。

掃除が終つた頃、雪夫人は、さつきの、夜会巻きの婦人と一緒に、出てこられた。

「まあ、せいせいしましたね。さつそく、お掃除をして貰つたんですつてね」

と、婦人は愛そよくいひ、雪夫人を上座にすゑてから、

「ほんとに、お艶さんたら、何ていふ女でせう。ふだんは、散々、自分だけで、すき放題なことをしておきながら、こゝへ来て、急にあゝやつて、頑張つて、忠義立てを見せようつていふん

ですよ」

と、訴へるやうにいふ。お艶さんといふのは、さつき病室で見かけた三十そこその女のことだらう。一目で、商売上りといふことのわかる感じだった。

「でもね、お澄さん」

と、雪夫人はいつもの通りのやさしい顔で、「こゝは、どこまでも、お澄さんが、超越してどこから誰が出てきても、おちついていらつしやらずくつちやア、いけませんわ」

「え、そりやアもう、あたしも覚悟してゐるんですけれど。現に、今夜おそく、山形に疎開した、磐井つねさんもうるつて電話がきてますから」

それにしても、信濃老人が、若い頃から、重ねてきた好色の罪が、この土壇場へ来なければ、清算できなかつたとは、驚く可きだ。いはゞ、最後の審判の夜が、迫つてゐるのである。

「磐井さんなんて、わたし、知りませんわ」

と、雪夫人がいつた。

「御存知ないんですか。ホラ、武二郎さんのお母さんですよ」

「あゝ、あの方！ そんなら知つてます。何しろ、あんまり多いから」

と、雪夫人も、微笑をうかべていつた。

「だから、あたしは、我慢しても、お艶さんと、磐井さんとが、それこそ、摺み合ひにでもならなければいいと思つてますけれど」

「いやアね」

「それには、御臨終からお葬ひ万端、雪さまに、指図して頂くのが、一番いいんぢやないかと思ひますの」

「直之が間に合へば、ね」

「それが、むつかしいと思ひますから」

「困りましたわね」

「あたしがやれば、お艶さんが氣に入らないでせうし、お艶さんがやれば、磐井さんが、承知しないでせう。さうかつて、磐井さんにやらせるわけにもいきませんもの」

「ほんとに、お艶さんが、あばれたりしたらお父さまの大恥ですものね」

「さつきの劍幕では、何をやるかしれませんよ。お艶さんにはせると、あたしが、まるで、殺したやうに、ツケツケ、いふんですもの」

と、お澄は、取りのぼせてゐるせむか、すぐ、涙声になる。ところへ、慌しく、看護婦さんが走つてきた。そして、様子が變つたから、すぐ来い、といつた。

浜子は病室へはいかず、離れて、待機してゐた。

いよいよ、臨終と見えて、さつきまで、シンとしてゐた邸内も、にはかに騒ぎ立つ様子だった。廊下を走る足音も、慌しい。浜子も、緊張して胸が痛かつた。

病室からは、泣き声が聞えた。いろんな女の泣声であつた。雪夫人のもの、そのなかにまじつてゐるのだらうか。いづれにしても、一番、純

粋な声が、雪夫人のに違ひないと、浜子は思つた。

電話で、知らせが八方へ散り、おそくなつてから、親類の人達が、かけつけてきた。十時過ぎて、さつきの話の磐井つねが入つてくると、案の定、故人の枕もとで、声高く諍ふ女たちの声がした。まもなく、雪夫人は歸つてきた。炬燵をつくつておいたので、その中へ膝だけ入れ、「浜子さんにも、とんだところをお見せしてしまつたわね」といつた。

「そんなことはございません」

「ごめんなさい。でも、昔の華族の家なんかみんな、こんな風だらうと思ひますよ。男がどうしても、勝手な真似をしましたからね」

「あゝいふ方、何て、仰言るんでせうか」

「昔風にいへば、お部屋さまでせう。今の言葉でいふと、二号さんとか、三号さんとかになるんでせう」

浜子は、こんな時にいひ出すのは、どうかと、躊躇したが、思ひきつて、

「おくさま、実は、この間から申し上げようとばかり思つてゐたことでございますけれど」

「何ですか」

「おくさまが、京都へお出かけ遊ばしたお留守の方さまといふ方が、おたづねになりましたの」

しかし、雪夫人の表情は、微塵も動く様子がない。浜子は、もう少し、抵抗が欲しかつたの

にと思ひながら、方哉から、チヨコレートパイを頂いた話、寺石さんには、黙っておけと仰言つた話、塩沢の紺飛白の上に、黒のもぢりを着てゐたことなどを、話した。

「あの方、何だと思ひますか」

と、雪夫人は、反問した。

「はい、御親類の方でいらつしやいませう。貴族を感じましたけれど」

「いいえ」

「では、役者衆かしら、歌舞伎畑の若手の俳優ではございません？」

「浜子さんの空想は、飛躍ですね。でも、両方とも、当つてゐませんわ。あの方は文学者ですよ」

といった。

「詩も書くし、譯訳もするんですが、たまに小説も書きますわ。『五つのスリッパ』とか『鏡面』なんか、書いたんですよ」

「それぢやアあの方が菊中夏二さんですか」

「ペンネームですわ」

「まあ——ちつとも知らないもんだから。でもさうは、見えないわ」

「こんどは方哉さんに、奢らせなくつちや。浜子さんに、役者に見立てられたんだから」

「あら、いやですわ。おくさま。そんなこと仰言つちや」

と、浜子は顔を染めた。

その晩は、お通夜といふことで、雪夫人はお座敷とお離れの間を二三度、往復しながら、朝

まで、帯をおとさにならなかつたが、それでも更けてからは、一時間程、床の上に、横になつた。浜子は、その間、蒲団の裾へ廻つて、おみ足をもんだ。こはぜを外して足袋をぬがせ、はじめて、ぢかに、雪夫人の肌にふれたときは、異様なものが、胸を走つた。

小さい、おみ足であつた。足袋は、九文と承つたが、これで九文あるのかしら。かかとも、スベスベして、あかぎれやひびなどは、どこにもない。みがいた玉を手包む思ひであつたが、しかも、この玉には、血が通つてゐて、ほのぼのした体温が、感じられるのであるから、よい、うつとりせざるを得ない。

「浜子さんは、お上手ね」

と、雪夫人は、床の中からいつた。

「いいえ、下手ですわ」

「どこで、習つたの」

「マツサージですか。これは、山の駅にゐました頃講習でおぼえました。労働がオーバーすると、みんな、やりつこしましたの。でもマツサージのために、風儀が紊れる心配もありましたの」

「男の人の、やるんですか」

「あたしは、いやだから、したことありませんでしたわ」

その中に、鶏がなき、遠く、高架線走る電車の音がした。

一日おいて、次の日が、告別式であつた。場

所は築地の本願寺で、今ときとしては、盛儀だつた。

喪主は、直之だつたが、たうとう、間に合はなかつたので、雪夫人がその座についた。その次が、磐井つねになるか、お澄さんになるかで、大騒ぎがおこつた。結局、武二郎が立つことになつた。その代り、武二郎に並んで、お澄さんが立ち、その次が、お艶さん。磐井つねは、後列になつた。浜子は、最終尾の三列目だつたが、会葬者がつめかけてくると、クロークが手不足になつたので、その方を手伝つた。

「この間は失敬」

といふ声に、頭を上げると、菊中夏二が立つてゐたのには、驚いた。

この間とは違つて茶のオーバーを着てゐる。ぬぐと、モーニングで、これが又、よく似合つた。浜子はドキドキした。声が上がつてしまつた。

「もう、京都から、お帰り遊ばしたの？」

「昨日、帰つたんです。ちよつと——」

と、背ろむきになつて、これを渡して下さいと、小さな紙包を出し、

「京都のおみやげだといつて——」

さういつたかと思ふと、靴の踵の音立て、聲石を歩いていつた。

会葬者の列は、引きも切らなかつた。先代は、芸能界にも、寄附をしたり、ひいき役者の世話をしたりするのが、好きだつたので、さういふ方面からも、大ぜい、焼香に來た。然し浜子の

見るところでは、菊中夏二に立ちまざる男振り
は、ほかに見当らなかつたといへるのであつた。

その晩は、疲れたといつて、雪夫人は早く離

れへ引取つた。浜子は又、いつものやうに玉の

やうな、小さい踵をマッサージしながら菊中夏

二の話をした。あの紙包は何だらうと思つたが、

うっかりは聞けなかつた。今夜は少し、大胆に、

裾の間をわけて、柔いふくら脛近く、手をのば

した。雪夫人は、いやとは仰言らなかつた。踵

は玉といったが、脛はつき立ての餅のやうであ

つた。太からず細すぎず、蒲団の中から見る

由もないが、恐らくは、雪をあざむく白さであ

らう。

「お膝もお揉みませうか」

と、浜子は、わくわくしながらきいた。

「いい気持よ——おねがひするわ」

と、仰言るので、絹や縮緬の奥へ手を入れ膝

がしらのあたりを、軽く、揉んだ。そこはまる

で、桃の実を思はせた。一口、嚙んだら甘い果

汁が、滴りさうだ。

右をさみ、それから、左へ移らうとしたとき、

「浜子さん。この邸も、たうとう人手に渡らん

ですよ。信濃家も、没落だわ」

浜子は、驚いて手を休めた。

「まア、御冗談でございませう」

「冗談ぢやありませんよ。あけて見たら、財産

なんか、まるでなかつたんですもの。今日のお

葬式たつて、会社でしてくれただけですわ。そ

れに、煩けてやらなければならぬ人は多いし、

結局、わたしの手に入るのは、熱海の家だけと
いふことになりました」

「……………」

「かうなつてからでは、手おくれだけれど、そ

れでも、明日からでも、考へを入れかへなくつ

ちやなりません。根本から」

「はい」

「わたしね、熱海の家を、旅館にしては、と思

ふんだけど、どうでせう」

「まア、旅館」

ことの意外に、浜子は、坐り直した。

「あすこなら、温泉も出るし、間取りもよく出

来てゐると思ふの。どうでせう」

「おくさまが、経営なさるんですか」

「さうよ。わたしが、おかみさんになるの。寺

石さんがマネージャーね。浜子さんも、手伝

つてくれるでせうね」

「そりやア、無論、働きますわ。でも、何だか

おいたはしいやうな気がしますわ」

「さうしなけりや、ほんたうに、無一物なんで

すもの。生活に困つてしまふのよ」

「信じられませんか」

「さうね。かうしてゐると、贅沢ぜいたくですものね——

」

そのときだつた。ドタドタと、廊下に足音が

してガラリと障子があき、男の顔があらはれた。

べつ甲ぶちの眼鏡をかけ、酒気のためぬ態であ

る。

「オヤ、もう、御寝ごしか。葬式は、すんだんだつ

てね」

ドカンと坐ると、酒臭いゲツブをした。直之

氏にちがひない。雪夫人は、サツと起き直つた。

微塵、寝みだれた隙はなかつた。りんとして、

「着物を」と仰言り、浜子が、背ろから、お掛

けすると、堅く、伊達だてメを、おしめになつた。

浜子も機敏、足袋をはかせ、こはぜ一つ、洩ら

さずにしてのけた。

女部屋へ戻つてくると、みんなに冷やかされ

た。旦那様のお帰りで、追ひ出されてきたね、

といふのである。大きなお邸の女中たちは、も

つと行儀がいいのかと思つたら、あべこべであ

る。女部屋は、暇さへあれば、奥の悪口と猥談

ばかり、中でも、お辰といふのが、一番、すれ

つからしである。

「何しろ、旦那にしても、中旦那にしても、

道楽の仕放題をしつくて来た人だもの、ちつ

とや、そつとの刺戟では、面白くないつてんで、

あつちこつちに、罪の種をまいたからお葬式に、

お妾さんたちが、ワイワイいつて焼香争ひをす

るやうな、ザマのわるいことになるのさ」

などと、ツケツケいつたが、これは、何と

いはれても信濃家ともあるものが、文句のない

醜態で、昨日なぞはお棺の前で、お艶さんが、

髻井つねの耳をひつかくといふやうな修羅場を

演じ、それをみんな女中たちに見せてしまつた

のだ。お辰は、床に腹はらひひで、

「中旦那、不相交ふさう、お酒のんでゐるんだらう」